学会参加記三

琉球出兵に対する新たな視点の発見

牟田俊平

現代では当たり前のように日本の一県となっている沖縄県はかつて琉球王国という国家を形成し、日本本土とは異なる歴史を築いてきました。しかし現在の日本本土では、琉球王国という言葉は知っていてもいつ頃から日本になったのかを知らない人、琉球王国とはどのような国であったのかを知らない人、そしてどこまでが琉球王国の領地だったのかを知らない人が多くいるのが現状ではないでしょうか。そのため、沖縄が日本に組み込まれるうえで重要な出来事となった琉球出兵に対しても、その琉球出兵から今年で四〇〇年であるということに対しても、沖縄県内に比べ本土では非常に関心が低いように感じます。これは本土に住む人々にとって海を挟んだ県である沖縄の歴史は決して身近なものとはいえず、普段から沖縄を意識することが少ないからだと思います。しかしながら国防の面を考えてみても沖縄は日本の要であり、本土の人々の生活に関わる大きな役目を担っています。この文章を書いている現在でも、沖縄県の普天間基地の移設問題が連日といっていいほど新聞で報道されており、沖縄県内の基地がいかに国防上また外交上重要なものかを実感させられます。沖縄の歩んできた歴史の先にこういった問題が横たわっており、そのため沖縄の歴史は本土に生活する人にとっても無縁なものではなく、大きな意味を持っているのではないでしょうか。今回本学に於いて『島津氏の琉球出兵四〇〇年に考える―その実相と言説―』が開かれたこと、そしてそれに参加することができたことに感謝したいと思います。

ここでは今回の『島津氏の琉球出兵四〇〇年に考える―その実相と言説―』に参加し、特に大きく感じた二つのことを取り上げます。一つ目は琉球出兵四〇〇年ということで各地で開催されている講演会・シンポジウムについて感じたことを、二つ目は史学科の自分としては馴染みの薄い

文学的な面から見た琉球出兵について感じたことです。

一つ目ですが、琉球出兵四〇〇年ということで沖縄県を中心に多くの講演会やシンポジウムが開かれており、各地で盛り上がっているように思えます。すべての講演会・シンポジウムを見てきたわけではないので決して断定はできないのですが、これらの講演会・シンポジウムにある共通性があるように感じました。それは琉球出兵という出来事に対する考え方が、日本による琉球支配のはじまり・虐げられてきた琉球のはじまり、といったネガティブな方向、つまり「周囲の大国に振り回されてきた琉球」という考え方ではなかったように思えることです。ではどのようなものであったかといえば、琉球は琉球出兵に対してどのように対応したのか・近世琉球はどのような選択をしたのかといった琉球の主体性を重視した方向で進められてきたように感じます。つまり、周辺の国々によっていかに琉球が流されてきたのかではなく、琉球側はどうやって時代に対応していったのかということに重点が置かれているように思えるのです。

今回の報告でも豊見山和行氏の『敗者の戦略としての琉球外交―「唐・大和の御取合」を飼い慣らす―』の中で「琉球使節が江戸上りを行う場合、服装を中国風にするよう強制されていたのか」という話が出ました。これは決してそうではないという豊見山氏のご指摘があったように、琉球出兵後の薩摩支配から突然変わったわけではなく、それ以前から中国風だったものが薩摩の意向を受けて強調されていったということでした。

この「服装を中国風にするよう強制された」といった解釈は、いってしまえば薩摩に支配された受身の歴史・虐げられてきた歴史を象徴するようなものであり、このような解釈を信じている人も少なくないようです。私自身古琉球を学ぶ過程で多くの人に会っていますが、「古琉球は武器のない時代だった」「近世になり琉球の中継貿易が発展した」といった考えを持っている人に会うことが何回かありました。もちろんこういった解釈は正しいものではなく、多くの間違いを含んでいます。最近では研究が進み、古琉球という時代がどのようなものであったのか、薩摩の支配がどのようなものであったのか、こういったことが段々とわかってきました。それでもこのような間違った解釈は根強く残っているのが現状であるように感じます。そういった状況の中で今回のように琉球の主体性とはどのようなもので、琉球がどのような選択をしたのか、また薩摩の支配の実態、そして琉球出兵の経緯を詳しく見ていくことは、こういった間違った解釈を少しずつでも訂正していくことにつながるのではないでしょうか。

さて、二つ目の文学的な面から見た琉球出兵についてですが、史学科で琉球を歴史学の視点からしか見ていなかった私にとって非常に新鮮なものでした。私も卒論を進める途中で近世に曲亭馬琴によって書かれた『椿説弓張月』を扱おうとしたことがあります。結局、卒論の内容から外れてしまうことから『椿説弓張月』を使うことは見送ったのですが、今回の報告を聞き、再びこの物語に興味がわいてきました。『椿説弓張月』は源為朝が琉球に渡り、琉球王国を建国するまでを描いた作品であり、この作品からは当時の江戸の人々がどのような認識を持って琉球を見ていたかがわかるように思えます。この物語は源為朝の子・舜天が琉球王国の王となり建国をした、いわゆる「為朝伝説」がもとになっており、そのうえで作中には毛國鼎や尚寧といった別の時代の琉球の人物も多数登場するため、『椿説弓張月』からは著者である曲亭馬琴・葛飾北斎の琉球に関する知識の深さがみてとれます。また、それを支持した当時の江戸の人々の琉球に対する関心の高さもわかり、これは今回の渡辺憲司氏のコメントにあった「江戸の人々の唐や琉球に対する憧れ」につながるものがあるような印象を受けました。

今回の小峯和明氏の報告、目黒将士氏のコメントにあった〈薩琉軍記〉についてですが、この中でも『椿説弓張月』の影響を受けて為朝伝説を引用した箇所があり、中でも印象に残ったのは尚寧についての話です。小峯氏は、作中で尚寧という人物が驕り高ぶり悪政をしいた王として記されていたことは琉球出兵を正当化することにつながるのではないかとご指摘されていました。『椿説弓張月』に登場する尚寧も賢君とはいいがたく、ここに記された尚寧のイメージが影響を与えたと思えます。そう考えると一二世紀を舞台にした『椿説弓張月』になぜ尚寧が登場していたのかという疑問も、琉球出兵を正当化する意図があり、そのために四〇〇年も後の琉球国王であった尚寧を登場させたのではないかと考えることができます。

小峯氏も報告の最初にご指摘されていたように、〈薩琉軍記〉などの文学から当時の歴史を読み取ることは難しく、文学を琉球出兵の史料として使うことは少ないと感じます。しかし、この文学が書かれた江戸時代の人々がどのような目で琉球王国や琉球出兵を見ていたのかということは読み取ることができると思います。今回の講演会の題目である『島津氏の琉球出兵四〇〇年』を考えたときに、他の時代の人々はこの出来事をどのように考えたのかは重要なヒントとなるのではないでしょうか。

さて、今回の講演会に参加し感じたことを二つ述べてきましたが、最後に『島津氏の琉球出兵四〇〇年』について

自分なりに考えてみたいと思います。講演会のレジュメ冒頭の趣旨説明で荒野泰典氏が「やや変則的な形ではあるが、その後二七〇年も王国として存続することができた」と述べられているように、琉球出兵のあとも琉球王国は存在し、近代の琉球処分まで完全に日本に組み込まれることはありませんでした。仮にこれが琉球側の選択によって、琉球出兵という大事件を受け流すように被害を抑えて解決したのだとすれば、これはまさに豊見山氏の報告にあった「勝つことはできないが負けない外交」とみることができます。勝者である島津・幕府の選択は当然ながらその後の琉球に大きな影響を与えましたが、敗者である琉球王国の選択も、その後の歴史を構成する重要な要素であることを忘れてはならないと再認識しました。

私は島津出兵後も琉球処分、日清日露戦争、アジア・太平洋戦争、そしてアメリカ統治から返還と琉球・沖縄は大国に流されてきた印象を強く持っていたように思います。しかし今回の講演会に参加して、当たり前のことながら敗者の側にも選択があり、決して勝者の論理だけでは歴史は形成されないということを実感させられました。そしてその勝者と敗者の選択が現在につながっているのだと思います。

そして最後になりましたがこの事件を期に薩摩に組み込まれるようになった奄美についても目を向けなくてはならないように感じます。奄美にとって、島津氏の琉球出兵は琉球王国と切り離される出来事であり、奄美・琉球が同じ文化圏でありながらも別の歴史を歩むことになったきっかけともいえます。近世は薩摩の領地となり、戦後のアメリカ統治下では沖縄と同じく日本から切り離されましたが、返還の時期も沖縄より早く、結局現在に至るまで沖縄とは違った道を歩んできたように思えます。今回、琉球出兵が奄美にどのような影響を与えたのかを深く考察できなかったこともあり、ここを今後の課題にできたらと考えています。

恥ずかしながら私は古琉球そのものに目がいっており、今まで古琉球の終わりである島津出兵について考えることはほとんどありませんでした。今回講演会に参加して新たな視点で古琉球とそれに続く近世琉球を見つめ直すことができたと思います。

（本学文学部史学科学部生）